

見つるを、これにぞあやしくおもひしなど、おほせらるゝに、いとつらくうちもなきぬべき心
ちぞする、いであはれいみじき世の中ぞかしのちにふりつみたりし雪をうれしとおもひしを、
それはあいなしとて、かき捨よなどおほせごと侍しかと申せば、げにかたせじとおほしけるな
らんと、うへもわらはせおはします、

〔公任卿集〕二月に雪のいとたかう降たる、ゆきよりがさうしの前に、雪の山をいとたかうつくり

て、煙をたてたるに、雪のいとうふれば、からかさをおほひてたてたりければ、

東路のふじのたかねにあらねども三かきの山も煙立けり略○中

雪の山をつくり給うて

音にきく越の白ねは、えら山の雪つもりて、の名にこそ有けれ略○中

ゆきよりがさうしに、雪の山をつくりたるに、物にかきてさ、せ給ひける、

音にきく越の白山、えら雪の降つもりての事にぞ有ける

かへし、かねすみが女、

ふりつもる雪をのみみる白山のけふはかびある心ちこそすれ

ひさしう里なるころ、雪の山つくり給うたりとき、て奉りける、

おぼつかな今も昔も音にた、名をのみぞきくこしの白山

かへし

白山をよそに思は、我宿を今はこしとやおもひなりぬる

〔春記〕長暦四年元○長久 十一月十一日壬戌、從曉更雪降、深及一尺三寸、終日不休、略○中 殿下藤原并

四五輩、近習上達部、殿上人、立庭中、翫雪也、積而摸山、歟、予資○藤原 同以追從也、十二日癸亥、天陰、雪

深一尺四寸、略○中 仰藤原 云、御前之小庭、朝御前 飯、聚雪欲作山、宜仰其由者、予仰藏入章行、令召主殿